

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会記録

平成31年4月11日(木)午前9時13分～午前9時34分(9階908会議室)

○出席委員(11名)

委員長	高木 克尚	副委員長	尾形 武
委員	沢井 和宏	委員	二階堂 武文
委員	鈴木 正実	委員	根本 雅昭
委員	小松 良行	委員	村山 国子
委員	小野 京子	委員	山岸 清
委員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○議題

- 1 意見交換会の実績報告について
- 2 委員長報告について
- 3 その他

午前9時13分 開 議

(高木克尚委員長) ただいまから東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を開催いたします。

通常でない早い時間に開催をさせていただくことになりました。きょうは10時から改革検討会があるということで、ちょっと早目にご参集をいただきましたが、時間45分しかございませんので、ぜひ皆さんの建設的なご意見でスムーズに行いたいと思いますので、そのために、ご理解いただきたいために資料も一新してご説明をさせていただきますので、あわせてお願いを申し上げます。

本題に入る前に、過日行いました成蹊高校との意見交換会終了いたしましたので、委員長名で成蹊学園側に礼状を発送いたしましたことを報告をさせていただきます。

初めに、意見交換会の実績報告についてを議題といたします。

お手元の資料1をごらんください。3月に行った意見交換会で各グループから出た意見あるいは委員会としてのまとめを正副委員長手元で調整をさせていただきました。この内容については、概要としてまとめるとともに、同様の内容を市議会のホームページに掲載をする予定でございます。

各グループの意見あるいは委員会のまとめなどについて、委員の皆さんからご意見がございましたらよろしくお願いをいたします。

各グループの写真、あと代表的な意見交換の内容について列挙させていただきましたが、こんな形

で皆さんも写真に載ることになりますけれども、ご了承いただきたいと思います。

よろしいですか、こんな感じで。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 次に、委員長報告についてを議題といたします。

お手元の委員長報告骨子案をごらんいただきたいと思います。正副委員長手元で骨子案を作成をさせていただきました。骨子案については、全体の構成と提言内容の案を記載をさせていただいております。

まず、構成について説明をさせていただきますが、初めにこれまでの調査の経過を記載をし、その次に意見交換会の詳細な内容として、高校生から出た多くの意見あるいは委員会の中で我々が話し合った意見などを記載をしてはいかがかなと。

なお、意見交換会やこれまでの委員会の中で出た事業についての意見、アイデア、市長への提言提出の際には、一つの文書の長文の中に全て織り込むのではなくて、別紙としてまとめて市長に提出したい。結局長い経過を含めて長文で提言となると、お互いに出すほうも受けるほうも趣旨選択に非常に時間がかかるということもありますから、やっぱり高校生とやったすばらしい出来事はきちんとその中身だけで別紙に整理をして添付をして出すと、こういうスタンスにさせていただきたいなど。そのほうが経過と具体的な中身がきちんと振り分けができて、説明もしやすくなるだろうと、こういうふうに考えて市長提出に当たりたいと思っております。

骨子に戻りますけれども、2ページ目お開きいただいて、今回提言という単語ではなく、具体的にかくあるべきだという具体例を提示をしない政策提言ということで項目を整理をさせていただきました。そこもご理解をいただきたいと思います。

まず、提言の1つ目として、2020年までに行わなければならないことについての提言、これを記載いたします。なお、その提言と関連をして、国へ意見書の提出を行ってはいかがかと考えております。

その次に、提言の2つ目として、4ページ目ですけれども、2020年以降を見据えた提言、これを行い、最後にまとめの文章を委員長報告の中で文章を制作をして終了となります。

まず、2ページ目の政策提言の1についてであります。2020年までの提言としては、今回成蹊高校で意見交換会を行ったことにより、高校生が震災時に受けた支援とそれに対する感謝を伝える機会が2020年のオリンピックであるということを理解をして、それによってオリンピック・パラリンピックへの興味、関心が高まったように、若者へ世界中から受けた支援について学び、考える機会を数多く設けてはいかがですか。

そして、同じく成蹊高校の生徒がオリンピックにかかわりたいという参加意欲を持っておって、公認プログラムとして実施した意見交換会に参加することでオリンピック・パラリンピックへの意識がさらに高まった、全市民がオリンピック・パラリンピックに参画できるようにすべきであると、こういう2つの中身をこの2ページに整理をさせていただきました。

この整理の仕方、文教にかかわっている方は理解できると思うのですが、趣旨を背景と提言内容ということで非常に理解しやすい表記をさせていただきましたので、きょう皆さんに理解を賜りたいと思っております。

次に、3ページの意見書についてであります。福島から発信される感謝の気持ちあるいはオリンピック・パラリンピック関連イベントなどの元気な姿を国の協力で世界各国に広く伝えてもらいたい。特に外務省ですね。その上で可能であれば発信したことが世界各国でどう伝わったのか、どのように反応があったのかを確認をし、これは各国にある日本の大使館にその反応がどうだったのか、我々福島市が発信した内容がどう伝わったのかということ逆にもう一回福島市に結果をお聞かせくださいと、届けてほしいのだという中身、これが感謝の気持ちを発信した市民にとって大きな意義があって、喜びにもなるのだろうと、そんな内容の、あるいは方向性の意見書として考えておりますが、その方向性がよろしければ案文については次回お示しをしたいと思っておりますが、そういう方向性で正副委員長にご一任をいただければと思うのですが。一方的にやってくださいと終わってしまうのではなくて、福島市民はこんなに世界中の人に感謝しているのですという気持ちが本当に伝わったのかどうか、伝わったとすればどういう反応だったのか、これ通常の外務省の大使館のルールの中にあるそうですから、結果どうだったのかなということをもう一回僕らに、福島市に聞かせていただけませんかという趣旨で意見書を出したいなど。そんな方向性で考えてよろしいですか、意見書は。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) 次に、政策提言の2ですから、4ページ目になります。2020年以降の提言としては、4ページに記載のあるように、これは意見交換会の最後にまとめとして、私のほうから高校生の皆さんに福島という表記、漢字の表記とローマ字の表記で非常に違ったSNSの検索結果が出てきてしまうということをお話をしましたが、原発で受けたF u k u s h i m aというイメージ、これを払拭をさせるためにどんなことができるのかという趣旨を政策提言の2に入れ込みをさせていただきました。特に背景とすれば、オリンピックが被災地の福島市にとって最後のプレゼントなのかなと、そんな思いがあることから、何とかこれを福島市民も、あるいは国内外含めてわかっているために福島市は感謝と誇りを持ち続けなければならないでしょうと。そのために市政運営に意識的に定義づけをしていただいたり、F u k u s h i m aというローマ字の福島をどうアピールしていくとか、そんな政策に意識を持っていただきたいというのが政策提言の中身であります。

全体の構成、政策提言の1、政策提言の2、それから意見書、この内容について現時点で皆さんからご意見があればお話をいただきたいと思うのですが。

(村山国子委員) 全体的にはすばらしいなと思っております。2つあるのですけれども、1つは文字なのですけれども、政策提言の1の(1)でべきであるというふうになっていて、(2)でありますとなっているので、ここは語尾はそろえたほうがいいのかというふうに思いました。

あともう一つなのですけれども、4ページで最後のギフトであるというのがどうもちょっとひつか

かって、そういう受け身でいいのかなという、この表現はどうかなというふうに感じました。それにかわるものがちょっと思い浮かばないのですけれども、最後のギフトにはそういう受け身でいいのかなと、そういうふうに感じました。

(鈴木正実委員) 今の点私もちょっとギフトという言葉ひっかかっていたのですけれども、この文章の、よって本市はこれまでの支援に加えの後ろが、東京2020オリンピック・パラリンピックを復興五輪として市民一人一人が感謝の気持ちを持ってしっかり胸に刻んでとか、何かそういう言い方に変えるのはどうなのかなと思ったのですけれども。世界からの最後のギフトというのが、位置づけは復興五輪だという位置づけをしっかりと心に刻んでもらいたいのだと。

(高木克尚委員長) 福島で開催される、向こう100年はないですから、大きな出来事はそうそうないという気持ちがここに込められているのですけれども。

(村山国子委員) ひねくれた考えなのですけれども、私の考えはこのオリパラの福島開催というのは原発事故を終わったことにするための手段だというふうに思っているのです、こういう表現はちょっと納得いかないなというふうに思います。

(根本雅昭委員) 今のところではないのですけれども、いいですか。2ページ目の政策提言の1番の(1)、(2)なのですけれども、背景で前半は成蹊高校の生徒さん、意見交換会への参加前、復興五輪に対する意識は高いとは言えない状況であったで、その次の背景が(2)の背景ですね。私たちはこれ見ればわかるのですけれども、2020年大会に意見交換会前から興味、関心がありということで、ぱっと見るとあれと思うのです、これ。復興五輪という、復興という部分に多分意識が高いとは言えない状況であったということをお願いしたいのだと思ったのですけれども、なので意見交換会前はオリパラに対して意識が高いとは言えないと言って、その後は興味、関心がありということで、(2)の部分の意見交換前から興味、関心がありという部分特になくてもいいのかなというふうにも思うのですけれども、意見交換会を通してこういう文化祭をしたいという意見も出たというふうにしてもいいのではないかなと。何かほかの表現が、ぱっと見たときにわかりにくいなというふうに思いました。1点です。

(沢井和宏委員) 先ほどの最後のという部分なのですけれども、私も最後のというのはすごく、福島と世界の関係が切れるようなイメージがあるので、やはり使わないほうがいいのかな。ギフトは、ギフトよりも贈り物とかにしたほうが優しい。やはり最後のというのは、もうこれで福島とは支援とか関係はないよというようなイメージが何となくできてしまうような気がしておりました。

(小野京子委員) 私も今の沢井さんと同じ最後のギフトということで、上の段に市民一人一人感謝の気持ちを胸に刻みと先ほど鈴木委員さんも言われたのですけれども、やっぱりオリンピックを最後の贈り物ではなくて、オリンピックを誇りとか感謝をしながらこれから進んでいくという感じなので、最後のギフトというのはちょっと別な言葉のほうがいいかなと思います。

(山岸 清委員) 最後でなくて、最高とか、最大とか。最後だと切れるイメージあるから、現時点で

最高あるいは最大の贈り物、ギフトも贈り物も一緒だけれども、最後というところで終わりだってなるから、最高であればいいかななんて。最高、最大というような趣旨はオーケーです。

(小松良行委員) 同様に最後のギフトなのですけれども、例えば山岸委員は最大のというふうなことで言葉変えられましたが、ギフトということよりも、そうした温かい心を寄せられたという意味では、例えば最大の真心とか、何かそうした表現に変えるのはいかがかなと。それは適当かどうかわかりませんが。

以上です。

(沢井和宏委員) この前段の、直接は関係ないのかもしれないですけれども、今の福島市だけではなくて、福島県の震災後の現状なんかを短く入れたほうがいいのかな、現在こういう状況であるがということで、どこかの経過か何かにそういうのがあったほうが、震災後の福島の様子を客観的に示した上で未来に向かってということがあったほうがいいのかかななんて感じました。

(高木克尚委員長) 前文のほうはまだ全然考えていないので、意見交換会を受けての、そっちがメインになっているものですから。全体的な背景はどの程度盛り込むかちょっと検討させてください。これはという意見があれば盛り込みたいと思いますけれども。

正副委員長として今回ちょっと新しい視点で使いたい言葉が、復興オリンピックと一緒に感謝のオリンピックだというフレーズは織り込みたいなど、そんな思いを非常に正副委員長としては持ってまいりました。それが意見交換会をやった趣旨でもあって、高校生にも理解をしていただいたということもありますので、復興であり、感謝の場だということは何となくイメージ的にしていただければ幸いです。

こんな骨子で整理に当たってよろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、そのようにさせていただきます。

ただいまのご意見をもとにしながら、次回委員長報告の素案をお示しさせていただきたいと存じます。

次に、その他を議題といたします。

正副委員長からは特にございませんが、委員の皆さんから何かございましたらご発言をお願いします。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、以上で本日の東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を閉会いたします。ご苦労さまでした。

午前9時34分 散 会

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員長

高木 克尚